

## 「坂本直寛文書」について

はしがき

山下 重一

坂本竜馬の甥にあたる坂本直寛(幼名高松習吉、明治二年伯父坂本権平の養子となり、坂本南海男と改名。十七年直寛と改名。嘉永六へ一八五三)年—明治四四へ一九一一)年は、若くして英学を修め、原書で学んだ西欧政治思想を活用して自由民権運動に活躍し、後半生は北海道で開拓とキリスト教伝道に献身した注目すべき人物である。彼の事跡は長く忘れられていたが、彼の孫にあたる土居晴夫氏によって『坂本直寛著作集』(三巻・高知市立市民図書館・昭和四五年)が刊行されて以来、徐々に研究の対象とされて来た。稲田正次氏の先駆的な研究を初め、松岡僖一、森田敏彦氏のそれぞれの視角からの論考が発表され、北海道においても小池創造、小池喜孝、村上寿雄各氏による研究が進められた。<sup>(2)</sup>そして昭和六十年には吉田曠二氏による最初の評伝『竜馬復活・自由民権家坂本直寛の生涯』(朝日新聞社)が刊行された。<sup>(3)</sup>

著者は、昭和四十五年夏に高知で坂本直寛の英学について調査して以来、『著作集』の文献に助けられて、主として初期の政治論文について断続的に研究を行ってきたが、国学院短期大学の所在地滝川市に近い浦臼町を毎夏の集中講義の度に訪れて、北海

道における坂本直寛の後半生にも次第に関心を深めてきた<sup>④</sup>。

坂本直寛の説教草稿を主とする「坂本直寛文書」は、孫の坂本直行氏が所蔵していたが、同氏の逝去後、ツル夫人によって、平成元年に北海道文書館に寄贈された。国学院大学図書館は、同文書のマイクロ・フィルムを購入したので、本稿ではその一部を紹介したいと思う。その大部分がキリスト教関係の説教原稿で、年代を推定し得るものがごく僅かであるために、その全貌を把握することは至難であるが、筆者の観点から見て重要と思われる文書のいくつかに絞って重点的に検討を加えることにしたい。

- (1) 稲田正次「国会期成同盟の国約憲法制定への工作・自由党の結成」(『明治国家形成過程の研究』御茶の水書房・昭和四一年)、松岡惇一「坂本直寛研究の一視角―運動組織論からの接近」(『現代と思想』二四号・昭和五十一年)、森田敏彦「坂本南海男(直寛)の思想と生涯」(『高知の研究』第五卷近代篇・清文堂・昭和五七年)
- (2) 『北見市史』上巻(昭和五六年)の北光社に関する章、『聖園教会史』(新教出版社・昭和五七年)
- (3) 筆者の書評(『国学院法学』第二三巻第一号・昭和六〇年)参照。
- (4) 拙稿「坂本南海男と西洋政治思想」(『国学院法学』第八巻第三号・昭和四六年)「坂本直寛における西洋政治思想の受容」(『国学院大学紀要』第九巻・昭和四六年)、「坂本直寛の生涯と行動」(『英学史研究』第二二号・昭和五四年)、「自由民権の余韻―北海道における坂本直寛」(『土佐史談』一七六号・昭和六二年)

## 一 坂本直寛文書目録

先ず北海道文書館所蔵の坂本直寛目筆文書の目録を掲げる。請求記号B24 2からB24 126までのものであり、欠番の1と5、および127から136までは自筆文書以外の文献である。タイトルの「」は、文書館で仮に付したものである。

## 29 「坂本直寛文書」について

19	同第六章	〃	〃	二四丁
18	同第五章	〃	〃	二四丁
17	同第四章	〃	〃	二八丁
16	人間真正之生道如何第一章	文語体	明治一九	三六丁
15	〔日本青年の責任について〕	話し言葉	明治二七・三・九	一三丁
14	宗教的観念の根本と及野蛮哲学	話し言葉		一五丁
13	同其二	話し言葉	明治三八・一月	一五丁
12	基督教ハ赤十字社ノ母也其一	話し言葉	明治二七・一二・二五	一六丁
11	基督の精兵卒ゴルドン將軍の品性	口語体		九丁
10	台湾のキリスト教に付て	話し言葉	明治二八？	一二丁
9	〔時局論〕	文語体	明治二九	五丁
8	〔新日本青年の責任〕	話し言葉		一三丁
7	日本の現代と伝道	文語体		三丁
6	安心の大本	口語体	明治三九以降	三二丁
4	海外移民論	文語体	明治二八	三三丁
3	国家と青年	文語体		一四丁
2	予が青年時代の青年*	文語体	明治三五？	六丁

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
賢婦人即 Good Woman	同第七節	同第六節	同第五節	同第四節	同第三節	同第二節	教育第一節	〔基督教における孝教〕	〔聖書について〕	〔時勢と人物〕	人の価値	人の本質其三	不死の観念	自信	ジョセフパーカー博士に関する久佐々々	ブラックソールター	韓国及其拯救**
文語体	〃	〃	〃	〃	〃	〃	口語体	話し言葉	話し言葉	話し言葉	文語体	話し言葉	翻訳?	文語体	翻訳?	翻訳? 前後欠	文語体
明治三二―三三?																	明治三八
一四丁	一六丁	一三丁	一三丁	一一丁	一三丁	一〇丁	一五丁	一七丁	一八丁	一〇丁	四丁	九丁	六丁	三丁	二四丁	三一丁	三五丁

## 31 「坂本直寛文書」について

54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38
同第七	同第六	同第五	同第四	同第三	同第二	日本に於ける諸宗の動揺第一	キリスト教実験の証拠に付て (ヨハネ伝第四章四一・四二)	我党の教役者諸氏に一考を乞ふ	宗教トハ如何ナル物ゾ	〔同四〕	〔同三〕	〔家庭について二〕	宗教の雑合することの不都合	〔死について〕	〔論文章立て党書〕	如何にして患難に耐へ得る乎
〃	〃	〃	〃	〃	〃	話し言葉	話し言葉	文語体	話し言葉	〃	〃	話し言葉	断片	前後欠		文語体
								明治三八?								
一〇丁	九丁	一九丁	九丁	一〇丁	九丁	八丁	一五丁	四丁	七丁	一二丁	一二丁	一三丁	一丁	二丁	二丁	三丁

71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55
基督教論引用説第一	聖第一聖の性質	同其八	同其七	同其六	同其五	同其四	同其三	不完全なる宗教を論ず其二	〔人間の祖先について〕	人の死に関する摂理	人の企画と神の摂理 (旧約蔵言第一六章九・三三)	曠原之異人エリア***	善行の忍耐と神の祝福	聖書の実地研究	バイブル論	同第八
読書ノート	文語体	〃	〃	〃	〃	〃	〃	話し言葉	話し言葉	文語体	口語体	文語体	口語体	口語体	文語体	〃
明治一九												明治三六				
一九丁	二七丁	一〇丁	一〇丁	一〇丁	一二丁	一二丁	一三丁	一一丁	一三丁	二丁	四丁	三二丁	五丁	五丁	三丁	一三丁

## 33 「坂本直寛文書」について

85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72
(国家と宗教)	日本青年の義務と責任 (マタイ伝第六章一〇)	天国は近けり悔改よ (マタイ伝三章二)	神太始に一男一女を造り給ひて之を万国の始祖と為し給へり	良心の修養の必要 (創世記一・二七、ペテロ第一・三章一六・二二)	人間の性質について其二 (創世記一)	(聖書を信すべき理由を論ず)	更に此上を要す	信仰より生ずる勇氣	For Sermons and Addresses	Address for Youngmen first	The Words for Sermons and Addresses of Christianity	同一	宗教に関する久佐々々
話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	文語体	口語体	文語体	一―五四に細分	文語体	文語体	〃	文語体
	四月十七日本町講義所												
一五丁	一六丁	一三丁	一四丁	一二丁	一〇丁	八丁	四丁	四丁	三一丁	三八丁	四〇丁	三九丁	四一丁

97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86
全き者来る時は全からざる者廃るべし其一 (コリント人への第二の手紙第二二章)	それ信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を憑 拠とするもの也(ヘブル人の手紙第二章一)	下二段乙(〃)	上二段甲 (ルカ伝第一章三〇・五七)	基督の人性と神性に付て (ルカ伝第一章三〇・五七)	同乙	福音の二大要素甲 (マルコ伝第一六章一五)	基督教は赤十字の母也其三 (マタイ伝第五章四五ほか)	基督教と天然 (マタイ伝第六章二八ほか)	二魚という事に付て (マタイ伝第一四章一九)	凡そ労たる者重を負へる者我に來れ我汝等を 息ません(マタイ伝第八章二六)	信仰薄き者よ何ぞ恐るるや (マタイ伝第八章二六)
話し言葉	文語体	〃	話し言葉	話し言葉	〃	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉
明治一九			明治二八				明治二八				明治二八
一〇丁	六丁			一二丁	一五丁	一四丁	一二丁	一二丁	一三丁	一〇丁	一四丁



## 35 「坂本直寛文書」について

108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98
彼等目に淫婦を充し (ヘテロの第二の手紙第二章一四)	国民の本分、衆人を救ひ兄弟を愛し (ヘテロの第二の手紙第二章一七)	信仰其乙(ローマ人への手紙第五章二)	信仰其甲(ヘブル人への手紙第二章二)	或る人良心を棄て信仰を亡へり (テモテ人への第一の手紙第一章一九)	神によりて真理の義と潔にて造れる (エペソ人への手紙第四章二四)	爾曹恵に由て救を得 (エペソ人への手紙第二章八)	万の物をキリストに帰せしめん為に (エペソ人への手紙第一章一〇)	今は恩恵の時也今は救の日也 (コリント人への第二の手紙第六章二)	〔我は植ヘアポロは概ぐ〕 (コリント人への第一の手紙第三章六)	堅く信仰を立て男の如く強かれ (コリント人への第一の手紙第一六章一三)
話し言葉	話し言葉	〃	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	口語体	話し言葉	話し言葉
									明治二三	明治二八
一五丁	一四丁	一二丁	一四丁	一四丁	一〇丁	一〇丁	一二丁	一〇丁		

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109
同其四（エペソ書第五章二六・二七）	同其三（ローマ人への手紙第二章二四）	同其二 爾曹我が為に如何なる家を建てんと為る乎（使徒行伝第七章四七）	神の宮を我等如何に為すべき乎 其一（ヨハネ伝第二章一五）	同 坤（ 〃 ）	父の我に賜ひし杯を我飲まざらんや 乾（ヨハネ伝一八章一一ほか）	基督信徒と聖書の迫害 （ヨハネ伝第一章一八）	爾等に為しし如く爾等にも行はしめんが為也 （ヨハネ伝第一章一五）	我等友ラザロ寝たり吾彼を醒さん為に往べし （ヨハネ伝第一章一一・三三・三六）	我等も盲人なる乎 （ヨハネ伝第九章四〇）	神に信賴するは人の性也 （ヨハネ伝第三章三四）	神乎とは別言して人物又偉大な人なる意義也 （ヨハネ伝第一章一二）
〃	〃	〃	話し言葉	〃	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉	話し言葉
一二丁	一二丁	一二丁	一二丁	一二丁	一〇丁	一二丁	一二丁	一四丁	一二丁	一二丁	一二丁

121	神は如何なる性質の者か (ヨハネ伝第四章二四)	話し言葉		一〇丁
122	永生はキリストを知る是也 (ヨハネ伝第一七章三)	話し言葉		一〇丁
123	礼拝説教 第九卷	文語体	ノート一冊、第一一〇	一〇〇頁
124	明治四十二年九月以降 第一九	文語体	ノート一冊、第一一〇	一〇〇頁
125	明治四十三年一月より 第廿号	文語体	ノート一冊、第一一〇	九九頁
126	Milking Cows	雑記	明治三二―三三?	二一丁

\* 小池喜孝『鎖塚』(現代史出版会・昭和四八年)二七七―九頁に収録。

\* 『坂本直寛著作集』下巻一―三四頁に収録。

\*\*\* 『福音新報』明治三十六年七月一六―八、二七日連載。

## 二 初期の説教草稿

坂本直寛は、明治初期に東京の攻玉社で学んだ後、明治九年に立志学舎英学普通科に入学し、九年七月には第二等、十年十二月には第一等と常に最上級にランクされて、ベンサム、ミル、ギゾー、ラッセル、ギゾー等の原書によって西欧政治理論を学んだ<sup>①</sup>。彼は、立志学舎在学時代から自由民権の言論活動に参加し、卓抜な英語の学力を生かして西欧政治理論に基づく演説と論文執筆に尽力した。<sup>②</sup>『坂本直寛著作集』に収録された政治論文は、明治十年から十七年までに三十三篇に上っている。彼は、この時

代について、「立志社の学校に入りて、専らミル、スペンサー等の書を講究せり。而して予は立志社員にして頻りに自由民権を提道し、又好んで無神論を唱へたり。」と回顧している<sup>(2)</sup>。

彼が、高知に来て伝道したフルベッキ、タムソン、ナックス、ミロー等の宣教師に接してキリスト教に近付き、遂に明治十八年五月十五日、高知教会で片岡健吉等十二人と共に洗礼を受けたことは、彼の生涯の一大転機であった。彼の入信が自由民権思想の放棄ではなく、むしろその深化をもたらしたことは、次のような回顧によって明らかである。

「予が従来政事上に於て執り来りたる主義は抽象的の自由主義、即ち厳き個人主義にして、国家の興廢は一に此主義の消長にのみ関すると思惟せり。故に力て急激進捗説を唱導したりき。蓋し予をして茲に至らしめたるには英仏米等の革命史大に与りて力ありき。予が此三国の革命史に就て見し所は革命の因固より一ならずと雖も其遠因する処は唯自由主義の発動なりと思ひ、其興廢の由て関する処別に異形なるしかも至大なる一個の能力に係はる者ありとは曾て予の発見し能はざる所なりき。是れ予が唯物主義と云へる帷子<sup>おぼひ</sup>を以て予が面を蔽ひしが故也。故に予は国家興廢に係る所は敢て国民の品行如何に由るとの事を深く考へざりき。……

然るに今此帷子を除きて見る時は前日と大に異なる処を発見するに至れり。其興廢の依て来る所正しく別に無形無聲なる且つ至大なる一個の能力の有無に関せると明にせり。……蓋し此の能力は即ち全能者が吾人に付与する所の聖火にして、吾人の裏<sup>うち</sup>の凡の私情を焼き尽し吾人をして高潔ならしめ以て愛損信の諸徳を有せしむるものなり。主として社会問題を解くに要するは啻に単一なる智力の及ぶ所に非ず。必ずや宗教感情に起因し神の大能に激励せられて発動する所の公平なる潔白なる智力を要すべき也<sup>(4)</sup>。」

坂本直寛が説教を始めたのは、受洗後間もなくのことであつた。高知教会は、「<sup>はたらきて</sup>工人を欠くこと屢々」であつたので、彼は、「県下の各伝道地を巡回して道を伝えることを力」め、「素朴なる田舎の老人、単純なる山林の青年、或は殆ど無我淡泊なる農家の婦人等」を集めて、「尊厳なる神、愛なる救主の事など」を語った<sup>(5)</sup>。坂本直寛文書には、初期の説教草稿がかなり含まれていると思われるが、草稿の年代を確定することができないものは極めて少ない。その中「全き者来る時は全からざる者廢るべし」(97)と「不

完全なる宗教を論ず」(63-69)は、明治十八年のものと推定することができるので、この草稿を初期の説教の実例として検討したい。

97と63-69は、用紙、文体、筆跡から見ても、一連の説教草稿と思われる。八回にわたる長文の説教のテーマは、「私共の深く信じて毫も疑はぬ処の物、又文明開化の人心を治めて余りある力を持てる物はキリスト教」と断言し、「吾が日本の人々に造物主の道を知らしめ、其救の福音を伝ふるといふを我々が之ぞ生涯の務と存じます。」と前置きして、仏教を多角的に批判し、「仏法の不完全なる理由と其禍害を起こしたる理由」を詳述することであった。その第一回の終りに近い部分で、釈迦の入滅をセイロンで「キリスト誕生前五百四十二年、今より二千四百廿七年前と云」と記されていることから、一八八五年すなわち明治十八年の説教草稿であると推定することができる。

この草稿は、話し言葉で書かれた極めて平明なものであるが、原始仏教から大乘仏教へと変化した仏教の歴史を詳しく述べた部分はドイツの「ラルデンヘルク氏」(Ordenberg, Hermann, 1854-1920)・イギリスの「ライスデビッス氏」(Davids, Thomas William Rhys, 1843-1922)に依拠していると記されている。受洗直後の坂本直寛が得意の語学力で仏教に関する英語の専門書を読んで説教に織り込んでいたことは驚くべき努力と言わなければならない。この説教草稿は、仏教の歴史から日本の各宗派の批判に至るまで多岐にわたっているが、第七回から第八回にかけて述べられている仏教に対する次の三点の批判が特に注目される。

(一) 仏教は、「此の宇宙と万の物は如何にして立しものであるか」という問題に答えない。仏教は、「世界の起りの有と否と、又宇宙の限り有ると否を考へることを止めよ」と主張し、ただ涅槃寂滅を説くだけである。古今の聖賢は「此如き此世の有様は必ず無限知らざる可らざるの智慧と権能とを具へたる造主の手ぎはに依らざる可らず」と説いてきた。「斯く造主の存在を証拠とする論法の益々多く出るに従ひ、」仏教がいよいよ廃絶に瀕することは必然の勢いである。

(二) 「仏法僧侶の目的とする処は只涅槃の一方法ばかりであるから、世の中の入用なる社会の次第と暮し方の道は少しも心を用ゆる事ではない。」仏教の流行する国には、その政府が立憲政体を重んじ、その人民が自由自主の良民であり、学問が隆盛である実例を見ることができない。仏教が行われる国々では平等主義や個人主義を見ることができず、慈善病院、孤児院、聾啞学校、癩

病院などの施設はほとんどない。

(三) 仏教は、神の存在を認めず、また罪惡の甚だ恐るべきことを感じない。罪惡よりもかえってこの世の苦痛を捨つべきことを主張するが、キリスト教とは全く反対である。「キリスト教は、苦よりも何よりも最も捨つべき者を罪の基調と申します。なぜならば、罪の報ひの天罰を恐れるが為でございます。……人間凡罪の惡むべき事を深く感ずる時は、罪は元善に反対、即ち神に対して罪を犯したる事を信ずるのです。」仏教には、神に感謝し、懺悔する心は全くない。

この説教草稿は、キリスト教の教義の伝道よりも仏教に対する厳しい批判に終始しているが、恐らく現存している草稿としては最も古い説教として、入信後間もない頃の彼の真摯な伝道の姿勢を示しているものとして注目すべきであろう。

(1) 前掲『高知の研究』近代篇二五——二頁。

(2) 拙稿『スペンサーと日本近代』(御茶の水書房・昭和五八年) 八四——一〇四頁。

(3) 『坂本直寛著作集』上、三五頁。

(4) 同書七三——四頁。

(5) 同書七六頁。

### 三 「人間真正之生道如何」

坂本直寛文書中の最も注目すべき力作は、「人間真正之生道如何」(16—19)と題する論説である。その原稿の冒頭に記された目次は次の通りである。

第一章 生道之諸説

第二章 生道之大本

- 第三章 前章之附録
- 第四章 人生之始元
- 第五章 人心及其働
- 第六章 宗教之元理
- 第七章 他宗ト基督教
- 第八章 人類之罪惡
- 第九章 罪惡驅除之道
- 第十章 救之正道
- 第十一章 来世
- 第十二章 基督教之奇跡及預言
- 第十三章 基督之言行
- 第十四章 我邦之運命

この目次から見て、かなり大部の著述の構想であつたと思われるが、坂本文書に残されているのは、第一、四、五、六の四章だけである。この四章は、一丁約四五〇字で、通し丁数一二四丁までであるが、第二、三章の二〇丁分が抜けており、第七章以下は散逸したのか、或いは書かれずに終つたのか明らかではない。

この論説の執筆は、坂本直寛が洗礼を受けた翌年の明治十九年と推定することができる。第四章の最後の部分に「有名ナル英  
国自由党ノ總理ニシテ又文学者タルグラッドストーン氏ト博士ハクスレー氏」の論争が「昨年十一月発売ノ『ナインチーン、セン  
チュリー』ト題スル雑誌」で始まつたことに言及しているが、これは、イギリスの月刊誌『十九世紀』(Nineteenth Century)の  
一八八五年十一月号のグラッドストンの論文(William Ewart Gladstone, Dawn of Creation and of Worship)に対してハク  
スリが十二月号で反論し(Thomas Henry Huxley, Interpreters of Genesis and Nature)グラッドストーンが翌一八八六年一月

号で再論 (Proem to Genesis: A Plea for a fair trial) ハクスリが同年二月号で再び反論した (Mr. Gladstone and Genesis) 一連の論争である。グラッドストーンとハクスリとは、一八九〇—九一年に聖書の解釈についてやはり『十九世紀』誌上で論争を交わしているが、坂本直寛が依拠したのは、明らかに一八八五—六六年の論争である。彼は、洗礼を受ける前に宣教師ナックスと三日程議論して論破されて以来キリスト教の教義を研究し、明治十八年三月に「ナックス氏の再び来高するや、続て道を講究し漸く信仰の端緒を開くに至り、」同年五月十五日に洗礼を受けた。<sup>1)</sup> この間彼は、キリスト教に関する内外の文献を広く読んで、遂にその真理を認めて信仰の途に入ったに違いない。「人間真正之正道如何」は、入信によって新たに体得した世界観、人生観を体系的に吐露しようとした意欲作であり、未完成に終わったと思われるにも拘らず、彼の初期の政治論文に大きな影響を与えたベンサム、ミル、スペンサーなどの思想を新たな視点から再検討しようとした姿勢が明らかに示されている。また坂本文書中の「基督教論引用説第一」(71) は、彼が論説を書くために熟読した主として英語の文献の読書ノートと推定され、「人間真正之生道如何」を検討するための貴重な史料である。以下でこの画期的な論説を各章毎に検討して行くことにするが、その際彼のスペンサーとミルの思想に関する見解に特に注目したいと思う。

### (一) 生道之諸説

第一章「生道之諸説」は、三十三丁にわたる詳細な章であり、「生道之諸説」として、「孔孟ト云ヘル支那ノ聖賢」「同国ニ有名ナル異論家楊朱」「印度ノ豪傑即チ仏教ノ祖師タル釈迦」「英国ノ鴻儒ベンサム」「当今有名ナル哲学士スペンサー」の諸説を縦横に批判した雄篇である。ここでは、ベンサムとスペンサーに対する批判に絞って考察したい。坂本直寛は、ベンサムの「実利主義」を批判するに当って、島田三郎訳『立法論綱』(明治十一年・元老院刊)を引用しているが、本書の原典デュモン編『立法論』の英訳 (*The Theory of Legislation*, 1864) は、彼の立志学舎在学時代に第一・二等のテキストとして講読したものである。またスペンサーの「実利主義」批判については、松島剛訳『社会平権論』(明治十四—十六年・報告堂)に拠っているが、本書の原書『社会静学』(*Social Statics*, 1851) は、彼が初期の政治論文にしばしば援用し、邦訳出版以前に「原書に依りて立志社講堂に



講述<sup>②</sup>した愛読書であった。従つて、ベンサムとスペンサーに対する彼の批判を検討することは、極めて重要であると思われる。

彼が「人間ハ唯苦ヲ避ケ楽ニ付クヘキトコト若ク最衆民ノ最大幸福ヲ以テ目的トスルノ主義」と要約したベンサム「実利主義」に対して、彼は、「スペンサー氏モ云ヒシ如ク、最大幸福ト云ヘハ満天下皆其意義ヲ一樣ニセサルヘカラサルノ困難アルノミナラス、ベンサムノ論スル所ニ由レハ人間ノ良心道德等ヲ輕視シテ唯苦ヲ去リ楽ニ取ルノ感情ヲ主トスレハナリ。」と批判した。彼の批判の第一点は、ベンサムの量的功利主義によれば、「一般ノ国人若クハ各人ヲシテ其思想希望目的ヲ一樣ナラシメサルベカラズ。即チ同種類ノ快樂ヲ合一ニシ同種類ノ痛苦ヲモ亦一定ニセザルヲ得ザルナリ。」ということであり、彼は、「人間ノ思想ヲ一樣ナラシメント欲スルハ人ヲシテ自由ノ働無カラシメ、而テ機関制的ノ働ヲ興サントスルガ如ク、即チ有機物ヲ無機物ト同様ニセントスルニ異ナラサルナリ。」と反論した。この点は「碩儒スペンサー氏が其卓絶ノ思想ヲ以テ詳ニ論破シタレバ」と述べられたように、スペンサーの『社会静学』の冒頭の「便宜主義」(doctrine of expediency)に対する批判をほぼ踏襲している。すなわちスペンサーは、ベンサムの功利主義は、万能の立法者が快苦の計算に基づいて強大な権力を把握する根拠を提供するものとして痛烈に批判したのである。第二の批判は、「ベンサムガ良心、道義、自由等ヲ輕視スル事」に向けられた。ベンサムは、「良知」「道義感情」「自然法」等に訴える論議を「専断ノ主義、即チ愛憎ノ主義」(arbitrary principle, principle of sympathy and antipathy)として一蹴し、「其文字ノ形状ヲ異ニシ各自其仮面ヲ装フニ通ギズ。而テ其目的ハ自己ノ持論ト他人ノ説トヲ比較スル勞ヲ省テ其持論ニ捷利ヲ取ラントスルニ在ルナリ。」と主張した。坂本論文は、ベンサムの「実利主義」について前掲島田訳を引用して略述した後、「人ヲ専断ナリト議シテ己レ却テ甚キ億断ナラズヤ。」と反論し、「凡ソ良知ト云ヒ道義ト云フ者ハ抑人ト議論を為シテ自カラノ説ヲ装ヒ己ノ非ヲ俺ンガ為メニ便方主義ヨリ存スル者ニアラザルナリ。誠ニ天賦至誠ノ本心ナリト云フベシ。……真正ノ良知ハベンサムガ論難スル如キ者ニアラザルナリ。」と強調した。彼は、ベンサムも善惡の最終的な判断に際しては、「遂ニ彼ガ良知ニ帰スルヨリ他莫カルベシ。若シ果テ然ラバベンサムモ亦良知ヲ脱スル事能ハザルナリ。」と主張して、「ベンサムノ自家撞着」を指摘したのである。

坂本直寛は、ベンサムの「実利主義」を「人間豈避苦求楽ノミノ動物ナランヤ」と一蹴したのに反して、スペンサーについて

は、「其思想深遠ニ其議論高尚ニシテ惶ラクハ古今稀ナル哲学者ナルベシ。……彼政事ノ如キニ至テ持ニ余ハ其恩恵ヲ蒙ル処多シト為ス。又同氏が実利主義ヲ駁撃シテ道義感情ヲ以テ規矩ト為スガ如キ賛成スル所ナリ。」と讃辞を呈しているが、スペンサーについて「頗ル遺憾無キ能ハザル」点として、「其道德論ニ確乎タル基本ヲ見ザル事」すなわち「有神的ニ大本ヲ帰セザル事」を指摘している。彼が初期の政治活動について絶大な影響を受けたスペンサーに対する卒直な批判は、次の一節に明示されているので、かなり長文にわたるがその主要部分を引用する。

「蓋シスペンサー氏モ信ズルナラン。道義感情ハ人意ノ習慣ヨリモ遙ニ優リタル所ニ發生スル者ナリト。良知若クハ道義感情ハ經驗ニ由テ發スルヤ否ヤヲ問ハスシテ天理ニ合スルモノナラント。而テ良知若クハ道義感情ヲ胚胎シ来ル処ノ天理如何ニ至テハ同氏之ヲ歸スル所甚ダ曖昧ナリト云フヘシ。是レ同氏が議論ニ確乎不拔ノ大本無キ所以ナリ。而テ凡ソ社会人類ハ議論ニ由テ大ニ感ズル所アリ。又之由テ大ニ進歩スル所アリト雖特リ道德ノ点ニ至テ復如何トモスベカラザル処アリ。何ゾヤ。則チ心ノ罪惡ヲ滅尽シテ人類ヲ再生セシムル事はレナリ。スペンサー氏モ此点ニ至テハ大ニ窮迫スル所無キニアラザルハ其著書中ニ散見スル処ナリ。人心ノ罪惡ヲ抹殺シテ真正ノ徳性ヲ復活セシメ罪惡ノ羈絆ヲ脱シテ真正ノ自由ト為ス事ハ議論ヲ以テ能ハザル所ナリ。……」

然ルニ特リ此強大ナル罪惡ニ対シテ勁敵ヲ防隔シ其銳鋒ヲ挫折シテ漸ク進テ捷利ヲ奏スル勢力ヲ現ハス唯一アリ。唯一ノ儒者アリ。唯一ノ仁者アリ。唯一ノ義アリ。唯一ノ知者アリ。唯一ノ勇者アリ。即チ全智全能ニシテ至義至愛ナル天徳者イエスキリストアルノミ。天下道德ハ之ニ反シテ廢シ、之ニ從フテ興ル。天下ノ自由ハ之ニ逆フテ亡ヒ之ニ順フテ鞏固ナリ。学者如何ニ博ク如何ニ智ク如何ニ教アリトイヘドモ未タ其功ヲ奏シタル蹟ヲ見ザルナリ。然ルニイエスキリスト一度ベツレヘムノ小村ニ出シヨリ天下道德ノ有様ハ忽然トシテ其体面ヲ一変シタリ。惜ムベシスペンサー氏ハ此至大ナル真理ニ頓着セズ。人類道德ノ大本ニ注意セザルナリ。是レスペンサー氏が生前生後ノ欠点ト云フベキ所ナリ。」

ここに至って、「生道之諸説」に対する彼の批判がキリスト教の信仰によって「人間真正之生道」を説くための伏線であったことは明らかである。坂本直寛は、スペンサーから学んだ政治的自由主義の思想を維持しながら、彼の不可知論的宗教観を批判す

るに至った。彼が『第一原理』(*First Principles*, 1862)を熟読してスペンサーの思想を批判的に検討したことは、順次に検討しなければならない。

## (二) 人生之始元

第二章「生道之大本」と第三章「前章之付録」の原稿は欠けていて、第一章末尾の三十三丁から第四章「人生之始元」の冒頭五十三丁に飛んでいる。「人生ノ始元若クハ創生ノ元因」については、「近世学者社会ニ進化論ノ興リシヨリ之ヲ論スル益々精且ツ囂ニ至レリ。」と記し、「進化論ノ創造説ト基督教書中ノ創世記」とを「論スルニ価値アル説」として、スペンサーとダーウィンの進化論を『第一原理』(*First Principles*, 1862)と『人間の起源』(*The Descent of Man*, 1874)に依って検討かつ批判し、創世記の宇宙創造説と対比している。

彼は、スペンサーが「万物進化論ノ要旨」を「天地万物未ダ成立セザル先キニ当テ微分子ナル物アリシガ、進化ノ法則ニ由テ漸ク形ヲ為スニ至リ、始メ生無キ物ヨリ生有ル物ニ変遷シ、一変シテ下等ノ動植物ヲ為リ再変シテ次第第二上等ノ生物ニ進化シテ遂ニ人類ノ如キ生物中ノ最高尚ナル者ニ至レリ。」と要約しているが、スペンサーの進化論の法則については、「進化ハ間斷無キ物資ノ離積ト求積法ニ由テ不定不合ノ同性的ヨリ至定至合ノ同性的ニ移行行ク変化ナリ。」と述べている。これは、かなり難解な文章であるが、『第一原理』第十五章末尾の“Evolution is definable as a change from an incoherent homogeneity to coherent heterogeneity, accompanying the dissipation of motion and integration of matter.”の訳文と認められる。<sup>4)</sup>坂本直寛は、これに対して、「スペンサー氏ハ真理ヲ説明スル事能ザル場合ニ於テハ是レ力ナリトノ単言ヲ以テ其空所ヲ埋ル事ハ吾人ノ屢々其著書中ニ散見スル所ナリ。」と指摘し、「何ヲ以テ同氏ハ創世記ノ説ヲ輕視スルヤ。」と追及して、次のように批判している。

「スペンサー氏ハ最終ノ元因ヲ指シテ唯ニ力ノ存恒ト云ヘル短語ヲ以テ自家ノ説ヲ装ヒ世ノ論難ニ当ルモノノ如ク、己ガ不完全ノ責ヲ覆フガ如ク見ユルモ、而モ其力ハ如何ナル者カ又其力ハ如何ニシテ存在スルカト問ヘバ、即チ不可識ト云ヘル文字ヲ取り来テ答フルニ過ギザルナリ。蓋シ不可識的ハ虚無ナルヤ。スペンサー氏ハ決テ之レ無シト答ヘザルナリ。第一元因ハ仮令

其理ヲ明ニスル能ハザルモ亦確ニ存在スベキヲ論ジタリ。同氏ハ神ヲ無シト云ハズシテ創世記ノ説ク所ヲ虚誕ナルモノノ如ク輕視スルハ何事ゾヤ。」

「力ノ存恒」(persistence of force)、「不可識」(unknowable)とは、スペンサー哲学のキーワードであり、スペンサーの不可知論(agnosticism)に対する批判については、次節で検討しなければならない。ダーウィンの「強者生存」「優勝劣敗」による進化の理論に対する坂本直寛の批判は、断片的で明らかではないが、彼は、「地質学ノ語ル所ニ由レバ、太古人類ノ棲息セシ所ハ旧世界即チ東大陸ノ暖帯地方ナル事疑フベカラズ。ソハ此地方ニハ人類ノ最古キ歴史上ノ記蹟アリ。……創世記ニ記セル処ノ豊饒ナル有様ハ能ク此地質学ノ説ニ和合シ、ダーヴィンガ想像スル如キ最辛酸ナル生存競争ノ有様トハ都テ其緣故ノ甚ダ遠キモノナルヲ考フベキナリ。」と強調している。

進化論に対抗して創世記の創造説を堅持しようとした坂本直寛にとって、ハクスリと論争したグラッドストンの創造説擁護論は、極めて有力な根拠であった。彼は、この論争について、「抑此争論ノ元ヲ尋ルニ仏國ノ博士レヴサルレー氏一書ヲ著シテ宗教上ニ論難スル論アリシヨリグラッドストン氏が之ニ対シテ弁難スルニ始マレリ。」と述べているが、グラッドストンの第一論文は、フランスのプロテスタント神学者で福音自由派の指導者レヴィル(Reville, Albert, 1826-1906)の著書『宗教史序説』(*Prolegomènes de l'histoire des religions*, 1881. 英訳 *Prolegomena to the History of Religions*, 1884) に対する批判として書かれ、ハクスリの反論、グラッドストンの再論、ハクスリの再反論が『十九世紀』誌上に交互に発表された。坂本直寛が援用したのは、主としてグラッドストンの再論であり、彼は、次のように紹介している。

「グ氏ハ始メレヴサルレー氏が創世記見解ノ大ニ誤レルコトヲ述べ、而テ創世記ノ創造説ハ決テ學術ニ齟齬セザル理由ヲ弁ジ、又其創造ノ順序モ能ク學術上ノ説ト異ナラザルヲ論ジテ左ノ如ク掲ゲタリ。一、天地ノ創造ニテ、第一ニ現レタルモノハ光ニテ光遂ニ晦冥ヨリ分ル。二、次ニ水蒸氣現レ地上ニテ凝テ水トナル。爰ニテ始テ植物發生ス。三、天体現テ昼夜分ル。グ氏之ヲ以テ近頃出版ノフィリップス氏が地質学ノ地球起原論ニ対照スルニ著キ符合アルヲ見ルト云ヒ、而テグ氏ハ又生物發生ノ事ニ付テ創世記ノ順序ヲ左ノ如ク掲ゲタリ。一、陸地ノ現出ノ時期。二、植物ノ時期。三、魚類ナル動物ノ時期。四、鳥類ノ時

期。五、獸類ノ時期。六、人類ノ時期。……

グ氏ハ又博士フレストウキツチ氏ガ著セル所ノ出版中ナルト云ハル原稿ヨリ左ノ如ク其順序ヲ掲ケタリ。一、植物。二、魚類。三、鳥類。四、哺乳動物。五、人類。

右ノ如クグ氏ガハ氏ニ対シテ論シタル所ニ由レバ、往古来ノ地質学モ開ケザル時代ニ於テ現ハレタル創世記ハ學術ノ盛ナル近世ニ於テ発見シタル地質学ノ実事ト較テ異ナル所無ク恰モ創世記ハ地質学ニ率先シテ万物創造ノ順序ヲ指南シタルガ如キハ識ニ奇ナル妙ナル事ト云フベキナリ。嗚呼人ノ為シ能ハザル所ハ神之ヲ為シ、人ノ未ダ知ラザル所ハ神既ニ之ヲ人ニ現ハセリ。天地万物ノ創造説此創世記ヲ除テ他ニ真理ニ合スルモノアリヤ。」

坂本直寛が引用した創世記の解釈をめぐるグラッドストンとハクスリとの論争は、大政治家であつたと共に聖書の文字通りの信仰を堅持していたグラッドストンと不可知論をとる進化論的生物学者であつたハクスリとの客観的に見れば全く噛み合わなかつた対立であつた。坂本が政治活動に忙しかつた明治十九年にこの論争が載つた『十九世紀』誌を読んでいたことは驚くべきことであるが、彼は、グラッドストンの創造説擁護論だけを重視して、ハクスリの批判にはほとんど言及していない。彼は、イギリス自由党の首領としてのグラッドストンが敬虔な信仰を持ち、近代科学の実証と創世記の神話とが矛盾しないと強調したことに大いに意を強くしたに違いない。

### (三) 人心及其働

第五章の「人心及其働」で検討されているのは、「人心ハ如何ニシテ発生シ如何ニシテ存在シ又其働ハ如何ナルモノナルカ」という「人間真正ノ生道ヲ一定スルニ最緊要ナル問題」である。この章の叙述は、論点が十分に整理されていないために極めて難解であるが、彼は、「人心及其働」に関する主要な思想として、「以心論」「以物論」「パスチビズム」「不可識論」を挙げて、それぞれに批判を加えている。

「以心論」とは、「凡ソ我アリ物アリト云フ所ノモノハ畢竟之レアリト思フガ故ニ其存在スルガ如ク見ルト雖抑斯ノ如キモノア

ルベカラズ。五官ノ知ル所ノモノハ唯心ノ變形ニ外ナラザルナリ。」と主張するものである。坂本直寛は、「我思フ故ニ我存在ス」という「デスカーテス」(デカルト)の主張に対して、「真ニ我アリト云フ事ハ我レ實在スルガ故ニ我レアルナリ。我實在スレバコソ始テ思フ事モアルナリ。思フ故ニ我存在ストハ抑順序ヲ誤リタル説ト云ハザルヲ得ンヤ。」と反論しているが、「以心論」についてはこれ以上検討していない。

「パスチビスム」とは、「凡ソ事物ノ元質ヲ以テ決テ人ノ知ルベカラザルモノト為シ、而テ關係ニ過ズト為シ、其天地万物ノ元因終末ノ因スル所ニ至テハ吾人之ヲ究極スル能ハザルニ附シ去リ、而テ現象及ビ之ヲシテ発生セシムルモノトノ關係ニ至テハ學術ノ得テ説ク所ニアラズト為ス」ものである。彼は、この派に属する思想家としてコントとミルとを挙げているが、彼によれば、「吾人ノ知識ヲ説テ感情ヨリ生ズルモノト為シ心学ハ必ズ脳学タラザルベカラズ」と言うコントはむしろ「以物論」を取るものであり、ミルは「吾人ノ知識ナル者ハ感情ニ止ラズシテ猶他ノ觀念或ハ寧ロ感覺ニ由テ達スベキモノ」と論じ、道德については「連帶」の觀念によつて説いたと言う。この所論は極めて曖昧であるが、彼がミルと論じた次の一節は注目に価する。

「ミルハ心ヲ講究スルニ感情ヨリ諸觀念ヲ発生シ諸感覺ハ連帶ノ觀念ニ依テ千差万異ノ形状ニ表現スベシト云ヘドモ、而モ感情ナルモノハ之ヲ生ズベキモノ在テ始テ働キヲ為サザルヲ得ズ。如何トナレバ感情ハ人間無形上ノ位置ノ力タルニ過ギザルベケレバナリ。而テ靈魂在テ後始テ其働ヲ為スベキモノナレバナリ。ミル氏若シ靈魂ノ存在ヲ許容セバ、其持論ハ破壊セザルヲ得ザルナリ。若シ又靈魂ノ存在ヲ信ゼザレバ、其議論ハ結局鞏固ナル能ハズシテ懷疑主義ヲ免ルル事ヲ得ザルベキ也。」

坂本直寛は、初期の政治論文においてしばしばミルの著書、特に『代議政治論』(*Considerations on Representative Government*, 1861)を自由民権運動の理論的武器として援用したが、ミルの連想心理学(坂本の言う「連帶」とは連想 association を意味する)に対してはキリスト教の信仰からこのような批判を加えたのである。なお彼のミルの『宗教三論』(*Three Essays on Religion*, 1874)への言及については後述する。

次に「以物論」とは、「人間ノ靈性ト云フ者ハ必ズシモ別ニ成立スベキニアラズ、唯体中物質ノ組織ニ由テ存スルノミ。人心ノ働ハ即チ微分子ノ運動ニ由テ発生スルカニ過ギザルナリ。」との説であるが、坂本直寛は、「以物論ノ如キハ最モ余ガ反対スル所

ナリ。……若シ思想ヲ以テ物質ノ働キヨリ生ズルモノナリトセバ、人心ノ働ハ決テ活動ニナラズシテ死動ト云ハザルベカラズ。」と強調した。

彼が最も詳細に検討して批判したのは、「知ル所ノ者ト知ラルル所ノ者トハ唯現象ナリト為シ而テ此現象ノ背後ニアル実体ハ全ク識ルベカラズ。」とするスペンサーの「不可識論」であった。彼は、「スペンサー氏ニ依レバ自知ヲ以テ結局力ノ存恒ニ帰シタルガ如シ。盖シ此力ナル者モ敢テ説クベカラザルト為シ唯吾人ノ感覚ヨリ執テ存スル者若クハ元因トナセリ。」と指摘しているが、「基督教引用説第一」にはこれに関する『第一原理』第六章第六一節の末尾の部分の翻訳が見られるので、原文と共に引用する。

「力ノ存恒ト云フコトニ付テ吾人ノ解スル所ハ吾人ノ知識意思ニ超越スル或元因ノ存恒スル事はナリ。之ヲ講スルニ於テハ吾人ハ無始、無終、無限ノ実体ヲ講スルナリ。……夫レ経験ノ及バザル所ノ唯一真理ハ、即チ力ノ存恒ナリ。是レ経験ノ根底ニシテ凡ソ体験学ノ依テ則タラサルベカラズ。」(傍点原文)

By the Persistence of Force, we really means the persistence of some Cause which transcend our knowledge and conception. In asserting it we assert an Unconditioned Reality, without beginning or end…… The sole truth which transcend experience by underlying it, is thus the Persistence of Force. This being the basis of experience, must be the basis of any scientific organization of experiences.<sup>(6)</sup>

彼は、このような「不可識論」がスペンサーによって進化論と結合されたと指摘して、「凡ソ進化ハ測ルベカラザル力ノ働ノ法ナリ。同種ノ物質ハ之ニ由テ変化シ其発展スルニ從ツテ脳ノ組織ヲ起シ、次テ感覚ニ表現シ終ニ自知ノ心ヲモ発生スルニ至レリ。盖シ自治ノ心ハ漸次成長シタルモノナリ。夫レ直覚力ハ経験ノ結果ナリ。抑モ人及ヒ人類ハ遺伝法ニ由テ代々祖先ノ知識ヲ継続シ来テ、遂ニ直覚ノ智識ヲ得ルニ至レリ。」と要約している。しかし、前項でも見たように創造説を堅持して進化論を否定した彼にとつては、不可知論と進化論とを結合するスペンサーの理論は否定されざるを得なかった。また彼は、「基督教引用説第一」に『第一原理』第三章第二〇節「自己」の實在の信念」(Belief in the reality of self)の一節を訳出しているが、「人生真正之生道如

何」第五章は、この部分を要約した後、次のように批判している。

「凡ソ自己ト云フ自知ト云フモノ實在スル事ハ天下ノ人モ拳テ之ヲ識認シ学者モ亦然ルモノニテ如何ナル仮説モ是信仰ヨリ吾人ヲシテ脱セシムル事能ハズ。然レド此信仰ハ道理上ニ於テ諾スベカラズト云フト雖是説モ亦最吾人ノ解セザル所ナリ。スペンサー氏ハ自カラ我ト云フ者が實在スル事ハ実事ナリト云ヒ亦之ニ抵抗スル懷疑者ハ自殺スト迄云ヒナガラ、猶此信仰ハ思想ノ法ノ許サザル所ナリト云フハ所謂自家モ亦自殺スル者ト云フベシ。」

坂本直寛の政治思想に対するスペンサーの影響は絶大であり、彼は、国家権力に対する強烈な不信感や社会の基本原理解として「平等自由の法則」をスペンサーから学んだのであった。しかし、敬虔なクリスチャンになった彼にとっては、スペンサー哲学の不可知論的基礎は容認し得るものではなかった。彼は、「スペンサー氏がガスク疑惑スル所以ハ畢竟人間ノ大元則ヲ知ラザルニ由テ斯ル結果ニ陥タル事ナルベシ。」と指摘し、「キリスト云ク神ハ靈ナレハ拜スル者モ亦靈ト真ヲ以テ之ヲ拜スベキ也ト。今余ハ云ン。人ノ心ハ靈ナレバ、之ヲ論ズルモ又靈ト真理ヲ以テ論ズベキナリト。然リ靈性ノ思想ヲ以テ靈性ヲ論ズレバ何ゾ解スベカラザル事アラシヤ。何ゾ不可識ノ事アラシヤ。」と強調した。今や彼は、「造物主ハ宇宙万物ノ中ニ真理ヲ潜匿セシメ人間ノ心意ヲシテ之ヲ発見セシメ、亦已ト交際セシメン為ニ其間ニ通路ヲ預定セリ。……好シヤ人ニシテ此通路ニ躓キ五里霧中ニ彷徨スル事アルモ而カモ能ク真理ヲ熱望スル者ハ遂ニ其本路ニ歸リテ宿志ヲ達スル事ヲ得ベシ。」と断言するに至ったのである。

坂本直寛は、「古来世界ノ碩儒ガ宇宙万物ノ理ヲ講察シテ其妙工ニ成リシ事ヲ識認シ且ツ此妙工ヲ以テ上帝ノ経営ニ歸シテ毫モ其間ニ疑ヲ容レザル」ことを指摘しているが、「基督教引用説第一」の「企図ヲ見テ万有ノ元理ヲ知ル事」の条に訳文の下書きがあるミルの『宗教三論』の第三論文「有神論」(*Three Essays on Religion, Theism*)から次の引用をしている。

「抑宇宙万物ハ智慧アル経営者ノ企図ニ成レルト云フ説ノ妄想ニアラザルハ尚懷疑者ノ批評アル学者モ亦之ヲ允可スル事ト思ヘタリ。ミル氏云ク、此説ハ唯二万有ノ人工ニ似タル所アルニ由テ起ルニアラズ。蓋シ其相似スル所ニ特別ナル性質アルノ故ナリ。夫レ宇宙ハ人工ニ似タルトノ説ヲ立ル所以ハ決テ輕忽ナル事情ニ由ルニアラザル也。抑々経験上ニ由テ靈知ノ本元ト確實ナル連繫ヲ有スル事ヲ知ルベキ明証アルガ所以ナリ。此説タルヤ唯ニ比較論ニアラズ、帰納的ノ議論ナリト云フベシト。」



これは、「計画の徴候に基づく議論」(the Design Argument) に関する一節のかなり正確な訳文であり、原文は次の通りである。

The Design argument is not drawn from mere resemblances in Nature to the works of human intelligence, but from the special character of those resemblance, the circumstances in which it is alleged that the world resembles the works of man are not circumstances taken at random, but are particular instances of a circumstance which experience shows to have a real connection with an intelligent origin, the fact of conspiring to an end. The argument therefore is not one of mere analogy. As mere analogy it has its weight, but it is more than analogy. It surpasses analogy exactly as induction surpasses it. It is an inductive argument.<sup>(8)</sup>

恐らくこの一節は、晩年のミルがキリスト教に最も接近した心境の表現であって、坂本直寛が「懷疑論者にしてこの言あり。」として引用したことは無理からぬことであつた。しかしミルの「有神論」全体の論調は、キリスト教の真の信仰からは遠いものであつた。彼のキリスト観は、一貫して「神の子キリスト」ではなく、人間の理想像としての「人間イエス」であり、彼の神観は、たとえ自然の創造者計画者であるとしても決して全知全能ではなく、有限の存在にはかならなかつた。入信後の坂本直寛は、ミルとスペンサーの自由主義の政治思想を自由民権運動の理論として堅持し続けたとはいえ、宗教観乃至世界観については完全に彼等と袂別したのである。

#### (四) 宗教之元理

現存の最終章である「宗教之元理」は、先に示した全体の目次によって明らかなように、第七章以下で詳述するはずであつた宗教論の序説であつて、その内容は比較的乏しい。本論と言うべき第七章以下が書かれなかつたか、或いは散逸しまったことは誠に惜しめることである。

第六章は、先ず宗教起源論として、「太初ノ人夢ニ相似ノ人若クハ体ヨリ離レタル靈魂ヲ見テ是レ実事ナリトノ妄信ヲ起シ即チ

死者猶存在スルトノ信仰ヲ起」したというスペンサー説と「宗教ノ元因ハ太古ノ為政家ガ其群民ヲ統治スルノ方便トシテ巧妙ナル説ヲ作り人心ヲ籠絡セシ事ニ依テ其根ヲ取り来リシ者ナリ。」という説を「未ダ其元理ヲ解セザル想像説」として批判し、人類本来の宗教心の存在を強調して、「若シ人ニシテ元宗教心アラザレバ、如何ナル恐懼ナルモ如何ナル夢ヲ見ルモ又為政家ノ妙計アルモ決シテ之ニ伴ハレテ信仰スル事ハアラザルベシ。」と強調した。そして、無神論者や不可知論者も死に際して「神ヲ思念シ或ハ己ノ無神論ヲ為セシヲ後悔シ或ハ神ヲ拝スルニ至ル事ハ人ノ状態ナルガ如シ。」として、ヒューム、ヴォルテール、ペイン、ホッブズ、ミルなどの実例を挙げている。

彼はまた、スペンサーの次の一節をキリスト教の終末説と一致すると指摘している。それは、『第一原理』第二三章第一七七節の一部である。

「スペンサー氏ノ云ク、夫進化一度其歷程ヲ經過スルヤ其蓄積遂ニ運動ノ過度ニ由テ相分裂スルヤ、進化其平線ニ達スルヤ、変化ハ即チ終末ト成ルベシ。而シテ其平線ノ存在確固タレバ瓦解モ亦数百万歳ノ延期アルベク、然レド若シ然ラズシテ平線甚ダ確立セザル者ナレバ、其瓦解ハ数日ニ於テ起ルベシ云々。唯ニ此世界已ナラズ、或ハ其週圍ノ諸天体ニ於テモ亦共ニ分離瓦解スルノ時節到来セズンバアラザルナリト。此説ヲ以テ基督ガ預言シタル所ニ対照セバ、決テ相反対スル所ヲ見ザルベシ。」

When Evolution has run its course – when the aggregate has at length parted with its excess of motion, and habitually receives as much from its environment as it habitually loses when it has reached that equilibrium in which its changes end;…… According as its equilibrium is a very unstable or a very stable one, its dissolution may come quickly or may be indefinitely delayed may occur in a few days or may be postponed for millions of years.<sup>(6)</sup>

彼はまた、進化論の適者生存説がキリスト教の真理と符合することを指摘して次のように述べている。

「彼適種生存ノ説ハ其間頗ル真理ニ合スルモノアリ。此説ニ由レバ最能ク境遇ニ合ヒテ発達スル者ハ其生存存在スルモノニシテ之ニ合ハズシテ其弱キ者ハ其生滅亡スルモノノ如シ。今夫レ宗教上ニ付テ考フルモ最能ク宗教上ニ勢力アル者ハ無宗教若クハ不完全ナル宗教ニ打勝ツ事ハ吾人ガ経験ニ於テ其景勢ナルヲ見ル所ナリ。吾人眼ヲ開テ基督降世以来同教ノ勢力ヲ見ルニ実

ニ驚愕ニ堪ヘザルモノアリ。……基督云ク我既ニ世ニ勝リト。是レ能ク基督ガ凡テ世ニ打勝テ力ノ余アルヲ徴スルニ足ルベキナリ。右ニ挙ルガ如ク基督教ハ文明ノ進歩ト共ニ益々其勢力ヲ逞フスト雖他ノ宗教ノ如キハ之ニ反対スル景状ヲ見ルベクシテ人智ノ発達スルニ從フテ次第ニ其勢力ヲ落スモノト知ルベシ。而テ基督ガ結局ノ勝利ヲ得ルハ其審判ノ時ニアルベキナリ。是レ即チ優勝劣敗ノ最終ナリ。」

そして第六章の末尾に、「吾人ハ仮令最曖昧ナル者ト雖總テ宗教ハ本元ノ實在物ヲ含蓄スル事ヲ信ズベキ第一ノ道理ヲ発見シタリ。吾人ハ此ノ本元ノ實在物ハ諸宗教ニ特有スル所ノ不和ノ事物ガ相共ニ廃滅スルニ至ルモ猶殘存スベキ宗教普通ノ元質タル事ヲ推究シタリ。」という『第一原理』の一部と思われるスペンサーの言を引いて、「斯ノ如ク不信者ト雖深遠ナル学者ハ輕躁ニモ宗教ヲ以テ徒ラニ一種ノ方便ナリトシ、或ハ偶然的ノ者ニ歸シ去ルガ如キハ全ク為サザルナリ。宗教ノ由来スル所夫レ誠ニ深莫ナル道理アル哉」と結んでいるのである。

これまで重点的に検討してきた「人間真正之生道如何」は、入信後鋭意伝道に尽力していた坂本直寛が「真正之正道」すなわち人生觀を新たに体得した信仰の立場から体系的に説こうとした力作であり、特に彼が立志学舎で学習し或いは独力で熟読して自由民権運動の理論的武器としてきたペンサム、ミル、スペンサー等の思想を再検討し批判した部分が多いのは注目すべきことである。彼は、この論説を書いたと思われる明治十九年に高知の本町堀詰座で開かれたキリスト教演説会に登壇し、三月二十九日にはアッキンソン、オースティンと並んで「基督教の勢力」と題し、十一月五・六日にはマカルピン、グリナン、山本秀煌と並んで「人類起元論」と題して講演をしたが、坂本文書中にはその草稿と推定し得るものは見出されない。「人間真正之正道如何」は、その全貌を知ることができないとはいえ、入信後間もない頃の彼の読書と思索との真摯な記録として尊重されなければならぬであろう。

(1)『坂本直寛著作集』下巻三八頁。

(2)鈴木安蔵編『自由民権運動史』(光文社・昭和二三年) 七頁。

- (3) 島田三郎訳『立法論綱』巻一、一三一―一四丁。
- (4) Spencer, *First Principles*, American edition, 1885, p.360.
- (5) Gladstone, Proem to Genesis, *Nineteenth Century*, Jan. 1886, pp. 10-13.
- (6) Spencer, *op. cit.*, p.192d.
- (7) *ibid.*, pp.64-5.
- (8) Mill, *Three Essays on Religion*, 1874, pp.169-70.
- (9) Spencer, *op. cit.*, p.519.
- (10) 『竜馬復活』一〇七頁。

#### 四 入獄から北海道移住まで

坂本直寛は、入信後も高知県会議員として活動し、特に十九年秋に物部川堤防修理費をめぐる地域農民が知事と対決した際に、武市安哉、山本正心と共に知事に対する請願書の起草委員に選ばれ、二十年一月に武市と共に総代として知事に請願書を提出した。請願書却下の直後に開かれた臨時県会で、武市・坂本の二人が物部川問題につき知事を攻撃し、さらに三月にはこの二人が上京して県治局長末松謙澄と面会して請願書を提出した。二人は帰高後、農民側との対決の姿勢を変えなかった県当局を糾弾し続けたが、この間の坂本直寛の行動は、住民自治を民権の要とする彼の自由民権家としての本領を遺憾なく示したと言えよう。<sup>(1)</sup>

明治二十年後半は、自由民権運動の最後の全国的な盛り上りを見た時であり、彼の民権家としての活動のクライマックスであった。

二十年秋、三大事件建白運動が全国的規模で高揚するや、十月八日坂本宅に旧自由党員六十余名が集会し、総代の上京を決定

した。彼は、片岡健吉、山本幸彦、武市安哉、細川義昌と共に建白総代に選出され、十月二十七日に上京した。彼等は、全国から上京した同志と協議し、伊藤首相に面会して談判することを計画したが、十二月二十六日、保安条例の公布によって東京退去を命ぜられ、これを拒否したために多くの同志と共に石川島監獄に投じられた。彼は、明治二十二年二月十一日に憲法発布に伴う大赦によって釈放されるまで一年有余の間入獄し、さまざまな苦難を体験した。彼の獄中生活は、『予が信仰の経歴』第五―七に詳しく記されているから、<sup>②</sup>ここには獄中の彼が聖書を耽読して著しく信仰を深めた証しとして、漢詩二篇だけを引用しておきたい。

説かず陰房窮と愁へ

刑余別に主恩の優なる有り

痛心断えんと欲す凄風の夕

一片の清光楚囚を照らす

説くを休めよ阿郎縲紲の艱

刑余幸に主神の恩に欲す

君に勧む忘るる勿れ光児の志

聖婦の美名郭門に高し

出獄後の三月四日に一年半振りで高知に帰った後は、その僅か五箇月後の八月一日、種崎海岸で海水浴中に、妻鶴井、その妹兎美、西本いせ子の三人が溺死するという不慮の惨事に遭った。時に長女直意は九歳、次女直恵は七歳であった。彼は、翌年三月、中沢翠と再婚し、長男直道、次男勝清が生れたが、翠も結核のために明治二十八年九月十八日に死去した。彼が北海道に四

人の子供と共に伴って行ったのは、三番目の妻鹿であった。この間彼は、二十三年三月の補欠選挙で県会議員に返り咲き、二十四年九月に再選された。彼は、第一回総選挙後に立憲自由党と立憲改進黨との大同団結を訴えた「自由改進黨之諸氏に微衷を呈す」(『土陽新聞』明治二十三年九月二六―八日)と「外交に就て我官民の注意を乞ふ」(同年一〇月九―一五日)と題する政治論文を発表し、二十五年一月の総選挙に際して武市安哉を応援し、官憲の大干渉に対して県知事と県警部長に嚴重抗議した<sup>(3)</sup>。彼は、自由民権の初志を忘れず、県会議員としての職責を果しながら、キリスト教の信仰を深め、信仰の根柢を求めて読書と思索を進めたのである。

彼は、二十五年秋、片岡健吉と共に京都の同志社を訪問して、同校のチャペルで獄中生活を回想する演説をし、二十六年に任期満了によって高知県会議員の地位を去った後も、二十七年二月、衆議院議員総選挙に際して愛媛県自由党員の応援をし、選挙後三月初めに大阪の浪速伝道会の囑託によって、紀伊、志摩、伊賀、伊勢、三河、尾張、美濃等を巡回して伝道説教をした<sup>(5)</sup>。坂本文書(15)中の「三月九日田野上地筒井家」と添書された説教草稿は、この時のものと思われる。この草稿は、現代は物質文明や経済、国会、県会、村会などの制度は一応整備されたが、「之より人心の発達、人智の発達及び道德風俗は美と善とに変化を加へんとする時代」はこれからであると指摘して、「日本相続人たる青年」の義務が大きいことを強調した。彼は、「是迄の日本社会は、明治の世に成て、西洋より外部斗の文明が入り来て、一方には日本人の目を驚かされ、人々が見せかけの文明に生どられて立中にも、次で又実利主義とか云ふ妙な学問が交て来て、こん度は上等の人々の心をそそのかし……」と慨嘆し、「親子兄弟間柄も自ら恩と愛との熱はさめて仕舞、人と人の交際は敵と敵との様に用心をする事と成り、世渡りは愈々苦しく人道は益々危く、実に浅ましき日本社会と成りました。」と厳しく警告した。彼は、このような弊風の矯正を旧来の神道、仏教、儒教に求めることはできないと断言し、「我々はキリスト教有るを以て始めて安心仕、日本将来の義理と人情と文明進歩の主たる本は必ずキリスト教なるべし。」と強く訴えたのである。

彼はまた、この時期に東京で植村正久が発刊していた『福音新報』に一連の論説を発表して、全国のキリスト教徒に信仰に基づく団結を呼びかけた。筆者が確認したのは、次の六篇である。

信仰は利己的なるべからず（七七号・二六・九・二）

基督教青年懇親会演舌（八一号・二五・九・三〇）

伝道事業と伝達者（九一号・二五・一一・九）

余が信仰の経験（九八号・二六・一・二七）

信仰の鍛練（一一二号・二六・五・五）

ゲッセマネに於ける基督（一三四号・二六・一〇・五）

『予が信仰之経歴・続篇』には、石川島監獄服役中に申命記を読み、「神がモーセをして希伯来国民建設の偉業を為さしめ給ひたる事蹟を深く心に銘するに至り、之によりて、若し聖意に適はば将来神によりて或る事業を試みんとその規模を養」ったことが「予が拓殖事業を経営せんとする思想を起こしたる基」であつたと記されている。<sup>6</sup> 坂本直寛の北海道開拓に関する抱負を述べた史料としては、『著作集』中巻に、明治二十九年二月八日付の片岡健吉宛書簡と『福音新報』明治三十年一月二十九日の「北海道に拓殖事業を興さんとする意見」が収録されているが、坂本直寛文書（4）の「海外移民論」は、これ等を補う貴重な文書である。「海外移民論」は、榎本武揚、安藤太郎等による墨国移民組合の企画に賛同して書かれた三十三丁の自筆原稿で、次の八節に分れている。

- (一) 日清交戦は我邦人に海外雄飛の一大好機を与へたり
- (二) 我邦人戦後に処する覚悟一斑
- (三) 我邦人海外移民の必要
- (四) 殖民は文明進歩の一大動力也
- (五) 西半球に大なる植民地多し
- (六) 墨西哥に於ける植民地建設の計画
- (七) 殖民事業と宗教

(ハ)余が墨国殖民事業に関する理想

日清戦争の直後に書かれたと思われるこの原稿は、戦後の課題として、「軍事の拡張経済の進歩政事の改善等固より急務なりと雖も、傍ら亦世界の大勢を観察し将来の計を慮り以て大に海外的事業を試むべき也。」と主張した。彼は、「大国民」の将来の計画は経済的發展でなければならないが、「航海通商の拡張は殖民事業の拡張と相俟て而して其目的を達するものなり。」と強調し、特にメキシコ殖民が有望であることを詳述した。特に注目すべきは、殖民政策と宗教との関係を論じ、殖民事業の理想を開陳した最後の二章である。

彼は、「殖民事業を企図決行せんと欲する者は豪毅耐久忠直潔白等の徳性を備へて熱心之に従事するに非れば必ずや奏功の栄を見ること難かるべし。古来植民地の盛衰栄枯せし跡を見るに皆其移民の精神徳性の如何に関せざるは莫き也。」と強調し、「英国植民地が他諸国の何も為さゝる中に独り長足の進歩を為したる」理由として次の三点を指摘した。

第一、植民地は必ず労働の場処たるべく決て遊惰の場所たるべからず事

第二、植民地の繁栄は多忙なる個人の思想と労力との任務にありて決て遠方よりの力に由りて機関を使ふか如きものにあらざる事

第三、植民地は或る行為の自由あること無く干渉せらるゝことに由りては進歩し能はざる事

前掲「北海道に拓殖事業を興さんとする意見」は、ニュー・イングランドのピュリタン植民地が成功した理由として、この三条件に「第四、植民地は殖民の品行高潔なるに非れば、決して盛大を期する能はざる事」を加えた四条件を指摘している。<sup>(7)</sup>

彼は、「植民地を潔白に平和に維持したる者は皆宗教の力其強大なる部分を占めたる」実例として、ペンシルヴァニアにおいてウィリアム・ペンが早くより宗教の自由を確立したため、北米随一の植民地として成功したこと、囚人植民地であったニュー・サウスウェールズにおける文明の元素が「ジョンソンと云へる唯一人の篤信なる教師の来りて非常の勉勵を以て囚人を教訓したる」ことであつたこと、また一七四〇―五〇年に絶頂に達した南米パラグアイにおけるジェスイット派の神政支配を挙げ、さらに北海道樺戸郡浦臼の聖園農場について次のように記している。



「吾人は敢て遠く外国の例を引用せずとも近くには北海道の殖民地に於て現に其实例を見る也。故武市氏が開きたる農場の如きは宗教が如何に其新団体を保つかを知るに足る。彼の篤信に由て組織したる月形村の一人は其風俗のみならず事業上の労力に於いても他の村落と異なる処ありて其発達速なるものあるは北海道人の親しく知る処なるべし。是れ唯其組織法の宣しきのみならず宗教の鍊育大に殖民の精神を養ひ風俗を純良潔白に保ち以て殖民をして巨大なる希望を将来に抱かしむる所以也。」最終章の「余が墨国殖民事業に関する理想」では、メキシコの現状は共和政体でありながら専制の弊害が依然として多いから、「此国民を啓発せんには第一多数の人民をして自治の氣象を喚発せんしむる」ことが肝要であると強調して、次のように述べている。

「余の希望する処は若し我邦の殖民が幸にして発達するに至れば自治区を設立して彼の国民に一般に行はる、処の飲酒怠惰の陋習に反対せる嚴肅勤勉の良風を興し自から修め自から治て以て国民自治の基を開き他の殖民地及び土民村落の好模範と成り以て建国の骨髓たるべき健全なる中等社会を建設するの模形を造らんこと是れなり。而て殖民事業愈発達進歩し改めて多くの移民を送るに至れば余は往時亜細亜人種が欧羅巴に移住してハンガリー国を建設せし如く西半球の此中央の土地に一の健全なる自由郷を建設して我大なる日本民族の膨張と繁栄を期せんとす。盖し余が意クライブ、コルテズ等の如き野心するに非ず。唯々平和の手段を以て理想を行はんのみ。」

壮大なメキシコ移民計画は実現されずに終ったが、「海外移民論」に示された殖民計画をその理想とは、間もなく北海道移民事業に参画することによって実現の機会を得た。次に彼が北海道開拓の抱負を述べた明治二十九年二月八日付の片岡健吉宛書簡を引用する。

「拝啓仕候。過日も申上候如く小弟は祈りと熟考とに由て断然北海の拓殖を決意仕且由比大脇両兄の如きも大に賛成し共に願主と成りて此事業を助くへしとの事にて、弥小弟も望を厚く仕候。彼の天塩の野原殆ど十萬石に近き弘原は地味と云ひ運搬の便と云ひ頗る希望ある土地にして吾人は理想的の社会を建設するの試験なりと存候。希くは土佐兄弟の一手少なくとも日本信徒の原動力として彼の地に殖拓の事業を設計し将来日本社会に一の潔き義に生る神の国を作り度存候。先生も何卒御賛同被下

且つ願主の御一人と御成被下度、粗意は土居氏上京の時に何れ申上へく候。御多忙中とは察し候へ共御意見承被下候は幸の事に御座候。」

書簡中の由比は由比直枝、大脇は大脇充信で何れも高知財界の大物、土居は聖園農場の創始者武市安哉の女婿土居勝郎である。坂本直寛は、沢本楠瀬・前田駒次と共に二十九年五月に札幌に行ったが、初め予定していた天塩は御料局の土地になっていたの、他の土地を探し、北見国クンネツ原野を北光社の入植地として選定した。道庁の許可は八月十八日に下り、坂本ら三人は、二十日に現地に出発した。これに先立って、彼は、八月十一日に第二回夏期講演会で「北海道の発達」と題して講演をした。その主要部分は、先の「海外移民論」や三十年一月の『福音新報』の論文と重複するところが多いが、次の一部は、現地調査に赴く直前の彼が開拓の基本原則を強調したものであるとして注目に価する。

「国家は個人を以て成立す。分子不健全なれば其全体不健全なり。個人の自民自治独立の精神なくんば其国家の確乎たる独立望むべからず。此問題たるや徒に机上の問題にあらず。思ひ見よ此の自治の精神なかりせば北海道の将来果して如何。……

人は品格を要す。品格は自治の精神より来る。自治の精神なくんば村落の品格は発達と伴ふ。是れなければ立派なる植民地と云ふ能はざるなり。客言するに人は正直ならざる可からず。真面目ならざる可からず。植民地にして所謂小作主義を取り地主のみ多く取て小作の利不利を顧みざるが如くしては自治の精神を人心に吹き込む事を得る能はず。勿論困難なるも将来のよき発達進歩を思へば之れを忍んで此の悪弊を取り去らざる可からず。小作人とするよりも小地主として少とも小土地を与へ自治独立の人とせざる可からず。又教育もせざる可からず。現時は彼等の子孫を奴隸的に養育するが如し。又自作せしめずして小作せしめて之を疲労し之をよきなく事をなせしむる如きは絶へてよからず。人云ふ寛大にせし為めに失敗せりと。之れ然らず己の支配の力足らざりしによる。

我等は自治を要す。……宗教は人の品格を高むる者なるは余の喋々を要せざる処なり。……今日の北海道の有様を見れば特に宗教的道德の修練を要す。清教徒ピュリタンの如き心志が宗教によらずんば得べからず。今日の如く切迫の時代に於ては清教徒的の正義なる人心を要す。我邦人茲に注意して此の精神を養成発達せしめずして可ならんや。」

このようなピュリタン精神に基づく自作農民による自治の理想を胸に抱いた彼は、アブラハムが神命によってカナンに移住した事蹟を思いつつクネネツプ原野を調査し、一方高知では資本金九万円の合資会社北光社が設立され、坂本直寛を社長、沢本楠弥を副社長に選任した。明治三十年三月六日に坂本に率いられて高知を出発した第一次移民団は、四月三日に出発した坂本の率いる第二次移民団と四月三十日に網走で合流し、五月五日にようやく入植地に到着した。この間船中で流行した麻疹のため多くの死者を出し、現地の食料不足のため惨苦を嘗めたことは、『予が信仰の経歴・続篇』第五「予が北征及移民の困難」に切々と記されている。彼は、入植が一段落した八月末にクネネツプを去って、各地の教会で説教をした後十月二日に高知に帰った。そして翌年五月に二度渡道した時には、浦臼の聖園農場に定住し、北光社社長は沢本楠弥に代わった。この間の彼の動静について、『北見市史』の該当章の筆者小池喜孝氏は、「民権と国権の両思想がキリスト教精神によって統一されたコミュニティの姿」という彼の理想が北光社の株主の容れるところではなかったからであつたと指摘している。<sup>(10)</sup>このような推定は、『予が信仰の経歴・続篇』第八に「予は始め北見のクネネツプ原野の農場に移民を入れるや、此地は予が将来の居住地たるべしと思へり。然るに、予が心中一の疑を生ずるに至れり。即此地は果して神が予をして永遠に住居せしむる所なるや否かとの問題はれなり。……予が将来北海道に理想を試んとする為にも石狩原野に住むこと頗る至便なると思ひたり。」と記され、帰郷の際に浦臼の聖園農場に立ち寄って家屋を買う契約をし、翌三十一年五月二十五日、一家を挙げてここに定住したことの理由を裏付けているように思われる。筆者が浦臼町立歴史民俗資料館で村上寿雄氏から見せていただいた戸籍謄本のコピーによれば、彼が本籍地を高知県から浦臼村に移したのは、明治三十二年十一月二十一日であり、彼が北海道に骨を埋める決意をしていたことが偲ばれた。

彼は、三十二年五月に聖園教会の長老に選ばれ、三十五年二月に札幌に移るまで浦臼に居住したが、三十一年九月七日の石狩川大洪水に遭い、上京して板垣内務大臣に面会して八十万円の救済資金の支出を認められながら、その配分をめぐる紛争を調停してかえって誤解を生み、三十三年秋から完全な村八分の状態に陥るなど苦難の連続であつた。<sup>(12)</sup>彼は、三十五年二月に札幌に移って、キリスト教主義の『北辰日報』の主筆となったが、同年十一月十八日に旭川日本基督教教会に赴任した。<sup>(13)</sup>彼のこの間の行動をつぶさに追求した小池喜孝氏は、北海道庁の極秘文書『北海道に於ける左翼労働運動沿革史』（昭和六年）によって、彼が三十

五年に札幌で結成された大日本労働至誠会の会長となったことを突きとめ、「彼が実践運動に入る動機となったのは、三十三年の政友会の創立による自由黨員への失望と、石狩川治水事件による開拓への失望」であったのではないかと記しておられる<sup>14</sup>。この間の彼の行動には不明な点が多いが、彼が『福音新報』に発表した「青年ヨセフ」(三四年一月二五日―三五年一月一五日、四回連載)「麻西」(三五年七月一日―八月二日、六回連載)「曠原の異人エリヤ」(三六年七月一六日―九月三日、七回連載)の三篇は、何れも旧約聖書の人物に託して彼の信仰、人生観さらにきびしい政界批判を吐露した雄篇であり、第一篇は浦臼での閑居時代、第二篇は札幌での社会活動時代、第三篇は旭川での伝道時代に書かれた貴重な作品である<sup>15</sup>。

- (1)『竜馬復活』一一八―二三頁。
- (2)『坂本直寛著作集』下、四四―六七頁。
- (3)『竜馬復活』一三四―四一頁。
- (4)同書一四一頁。
- (5)『坂本直寛著作集』下、七七頁。
- (6)『坂本直寛著作集』中、九一―一二頁。
- (7)同書一一四頁。
- (8)同書一一一頁。
- (9)『北見市史』資料篇一四三―六頁。
- (10)『北見市史』上、七六九―七〇頁。
- (11)『坂本直寛著作集』下、一〇六頁。
- (12)同書一〇八―二五頁。
- (13)同書一二三―四五頁。
- (14)前掲『鎖塚』二一〇頁。

(15) 拙稿「自由民権の余韻―北海道における坂本直寛」(『土佐史談』一七六号・昭和六二年) 一五八―六三頁参照。

## 五 晩年の伝道

坂本直寛は、明治三十五年に宗教界に身を投じたことについて次のように述べている。

「此年八月札幌に於て、北海道教役者夏期修養会の開催せらるるあり、植村正久氏講師として来札せり。氏、予に談するに、公然宗教界に入て伝道せんことを以てす。盖し伝道は予が宿志にして、予抑北海道に来る始めに於ても農業の傍ら伝道せんことを思ひたり。而して又実地に於ても之を為しつつありき。今や植村氏の勸に付て考へ且つ神に祈りて決心せんとせり。予は深く考へ且つ祈りし後、終に意を決して直接宗教界に入らんとせり。而してピアソン氏の属するミッションに依て旭川日本基督教会に赴任することとは成れり。茲に於て、予は身を投ずることとは成れり。是れ即ち明治三十五年十一月十八日なりき。而して、明治三十七年六月五日を以て按手札を受けて教師たるに至れり。<sup>①</sup>」

彼の旭川での伝道の無二の協力者は、アメリカの牧師ピアソン夫妻 (George Peck Pierson, 1861-1939, Ida Goepf Pierson, 1862-1937) であった。夫妻が旭川で伝道したのは、明治三十五年から大正三年までであったが、旭川教会時代の坂本直寛の伝道活動のクライマックスは、ピアソン夫人と共に再三行なった監獄伝道であった。彼等の伝道活動は、『予が信仰の経歴・続篇』とピアソン夫人と共著の『北海道における聖霊の活動』<sup>②</sup> (*How the Holy Spirit came to the Hokkaido Japan, 1907*) に生々と記されている。明治三十九年から三年間の十勝監獄伝道を中心とする彼の活動は次のように旺盛なものであった。

明治三十九年 一月十八日から二十八日まで帯広の十勝監獄の職員と囚人に福音を説き、釧路でも伝道して二月六日旭川に帰る。

明治四十年 一月二十二日から二月五日まで十勝監獄伝道。三月二日から二十四日まで遠軽の学田農場、屯田兵村、紋別劇場等で伝道。十月初旬、ピアソン夫人と十勝監獄伝道。十一月に二回十勝監獄伝道。

四十一年 二月十五・十六日十勝監獄伝道。十七・十八日釧路伝道。四月十八日より十勝監獄伝道。

『予が信仰の経歴・続篇』は、第七回十勝監獄伝道の記録で終っているが、彼は、翌四十二年八月十一日、旭川講義所における牧会を辞任し、札幌に転居した。その理由は、旭川講義所の運営をめぐる教会内の意見が分裂し、外国ミッションから独立して自給教会にすることを強く要望した彼の主張が半独立（補助教会）を希望する役員の意見によって抑えられたからであったとい<sup>③</sup>う。彼は、札幌に移ってから八箇月間は旭川に応援伝道に來たが、札幌では牧師が渡米中の北一条教会の説教を担当し、四十二年八月以降は自給牧師（フリー）となつて、浦臼の聖園教会などで独自の伝道に従事した。

坂本直寛文書には、監獄伝道の説教草稿と思われるものは見出されない。以下に彼の晩年の説教の実例として、入獄と監獄伝道の体験を織り込んだ「安心之大本」（6）の一部と明治四十三年一月以降の「札拝説教第廿号」（125）の十篇の草稿中の第四「伝道と祈禱」とを引用したい。

#### 安心の大本

予初て十勝監獄を伝道した時或る重罪人を其監房に訪ふた事があつたが、其容貌は一見して殺人犯者なるを知るに足つた。彼はいかめしき面相を以て予を見つめた。予は彼に問を發して卿は此所に在て何か樂き事がある乎と云つた。彼は予に笑て樂きどころか屢々煩悶して夜もろく／＼安眠する事が出来ませぬと云つたから、予は心の中にさこそあらんと思ひつゝ、彼に向て卿の云ふ所きつとそうであるふ。然し今卿の目に隠れて居る者がある。卿若し其を發見する事が出来るなれば卿が憂き淋しき所と思ふ此監房は一変して宮殿の様に見ゆるに至るであらふと云つた。彼は固より予の言の意味を解する事が出来なかつたので其は怪しそくに思て居た。予は茲に於て彼にクリストの福音を説いた。而て彼は今は神を信する様に成て居るのである。ラサアフォールドと云へる人信仰の為に獄に繋がる、身と成つた事があつたが、彼は決して失望も落胆もせなかつた。彼獄中より其友人に書を送て斯く云つた。予クリストを念へば獄の壁の石も一つ残らで皆紅玉の珠の様に輝くのであると。是は果して迷信より起る現象であらふ乎。否な決してそうで無い。凡そ事物の善惡美醜は心の現象にある事は事實であるが、心が最も潔く善良

に最も美妙にして物を見る中は行れたる悪を醜き心を以て之を見るよりも遥に物の趣味が分る。同じ草花でも信仰の目を以て見る時は不信仰の目を以て見るよりも遥に趣味がある。デニソンと云へる人の言に「花上に滴れる紅露の袖にも全き天あり。雛菊の花を解し根を解せば以て神を解すべし。」<sup>ニ</sup>といつてあるが如何にもそうであると思わる。

信仰ある人の目には万事樂觀的に見ゆるも不信仰なる厭世家の目には万事皆悉く悲觀的に見ゆるのである。ボルテールと云ふ人は世の光榮を一身に集めた有名な学者であつたが、然し彼は不信者にして常に人世を悲觀して居た。彼は「人世は繫く被われたる荆棘の様なものであるから、之を免がれんには早く之を過逝<sup>スギス</sup>より外に途が無い。我ら此不幸な世に永く住めば住む程我らを害する荆棘の力が弥々強いのである。」と云て居る。人々はラサアフォルドの如く仮令監獄の壁の石下も紅玉の如く見ゆるのである。予も又屢々ラサアフォルドの様に感じた事があつた。明治二十年保安条例に由て同志の人々と共に石川島の監獄に繋れた時獄中にて雪隠の掃除をさせられたが、初の程は頗る不快なる感じがして真にいやな思ひがした。其中予はクリストを念した。クリストか天の光榮を抛て吾ら罪人と儀を同ふしあく迄人類の悲惨を嘗め尽し且つ其弟子らの足を洗て彼らの謙遜を教へ給ふた事を念ひ起すに至て予は忽にして不快の念が無く成つた。天より右は快く獄中の生活を為す様に成つたのであつた。神を信じクリストを念ふのは昔に斯の如きのみで無い。吾らをして益々潔く貴く平和にして遂には天の光榮に入らしむるのである。聖書に「靈の事を送るは生命なり安きなり」と教てある。靈の事を念ふ結果は第一自己の罪を赦されて天の光榮に入ることが出来る。第二は神と交る所に従て其愛を確め以てクリストを通して神の凡ての恩を得る事が出来る。今日十勝監獄の重罪人の中には神を信じクリストの救を確に自覺した事に由て真に安心の境に達して居る者が少くない。予は前にも述たる如く或る囚人に卿の目に隠れたる者を発見する事が出来たならば卿が淋しく思ふ此監房は一変して宮殿の様に感ずるに至らんと云ひしが、彼らは今真に宮殿に住ふ人の如く喜ばしく監獄の生活を為しつゝある。彼らは神を知らざる貴顕紳士よりも寧ろ安心して幸なる生活を為して居るのである。

予は今進て安心の大本とは如何なるものであるか、又如何にして真正の安心を為す事が出来る乎との問題を述て見よ。クリストの聖言に

我は平安を爾曹に達す。我が平安を爾曹に与ふ我が与ふる所は世の与る所の如者に非ず爾ら心に憂る勿れ又懼る勿れとあるが、是が即ち神より与へらるゝ眞の安心である。此我が平安と云へるクリストの聖言は吾人の安心の依て立つ所の大本である。此基礎の上に確立したる安心立命の道は実に鞏固なるものにて、之を奪ふ者は他に無いのである。クリストは曾て弟子らに答て

爾らも今憂ふ然れど我また爾曹を見ん其時爾らの心喜ぶべし其喜を奪ふ者あらじ

と言ひ給ひたるが、吾人も亦クリストを確に自覚する時は如何なる逆境にあるも眞に欣然たる事が出来る。予屢々逆境に於てクリストを自覚した事があつたが、その時の喜と云ふものは眞に言にて云ふ事の出来ぬ程であつた。如何なる艱難も予が喜を奪ひ去る事が出来なかつたのである。

### 伝道と祈禱

兄弟よ爾ら我らの為に祈り主の道をして疾くひろまり栄を受ると爾らの中の如くならしめ……

テサロニケ后 三〇 一

今や吾人將に來らんとする協同伝道に就て如何にしてなすべき乎と云ふ事を考えれば吾人はテサロニケに於る教会が如何に發達せしかを追想せざるを得ざるなり。

パウロはコリントに於て伝道を開始せしに最初に於ては事情中々困難にして意の如くならず、甚だ心を勞せしか此殆ど失望せんとせし時に當て先きにテサロニケに於ける伝道が大に成功せし事を思ひ出してその如くコリントに於ても成功せしやと思ひ扱こそテサロニケの教会に此書を送り其同情と彼らの祈りと求めたるなれ。

扱テサロニケに於る伝道が速に其功を奏して教会の健全なるに至りたるは如何なる方法なりしぞ。盖しテサロニケ伝道の方法はコリントに於る伝道の方法より遙かに勝りたるものありしか故なる乎、伝道者の精神に於て大に異なる所ありしに依る乎、若くは外部の状態がテサロニケに於てはコリントよりも遙に順境なりし乎、否然らざりしなり。



コリントに於ては頑硬なるユダヤ人の妨害ありしと雖もテサロニケに於ても亦決して平和の中に歓迎せられたる者にあらず。其伝道は大なる迫害の中に在て成功せしを見るなり。本書一〇四―七に於るパウロの言に依て之を見又前書一〇六―十に於る言に依りて見るもテサロニケの信者は決して平和の中に發達したるにあらずして寧ろ大なる迫害の裏に然かも速に伝道上著しき効果を修め且つテサロニケの信者の信仰と工が弘く其評判と成りて此の模範と成るに至りたる事明なりと云べし。実にテサロニケの伝道は只其一地方に止らずして凡て其近傍の地方に迄弘まりしなり。

パウロがテサロニケの信者を賞して

なんじら大なる難の中に聖霊の喜樂をもて道を愛す。我ら救主に効ひ、マケドニアとアカヤに在る凡ての信者の規範と成れり。主の道爾らより響きし音にマケドニア、アカヤのみならず而て爾らが神に向つる信仰凡ての處に広れり。

と云ひし言によりて見るに彼の信者らは実に伝道の模範を示したる事明なるべし。彼らが當時の世の中に於て音にマケドニアの信者の模範と成りしのみならず今日我邦の教会の模範なるなり。予は本年の協同伝道を為すに当て吾人と初代のテサロニケの信者を模範として働き度ものと思ふなり。

抑テサロニケ教会が大なる迫害のあるにも関せず其伝道が遂に成功したるは敢て他にあらず彼らはパウロの伝道を助けて大に工きしと其聖霊の喜樂を以て忍耐し厚き祈りを以て主の道の弘る事拡張する事に勤めたるが故なり。是れ即ちテサロニケ伝道が大に成功せし所以となす。蓋しテサロニケの教会は當時に在ては決して大教会にあらず其勢力四方を圧するに足るものありしにあらず。人の目を以て見る中に敢て盛大と云ふべきものにあらず。其教会員の数は甚だ少く、財産家、権力家など人の目を引く者とは何もあざりき。然らばパウロがコリントに伝道するに当て斯く微々なる教会に祈りを籠め書を送りたるは唯彼らの精神を其厚き祈の力ある事を見たればなり。

其教会の会員の数多ならざりしも其愛心の農耕なると忍耐力の強きと挫けざる熱心とはパウロをして伝道上有力なる事を認めしめ又真に之に信賴せしめたる所以なりき。抑伝道上の成功は牧師、伝道者の能力にありと思ふは大なる誤りなり。勿論是らの人々の人柄と信仰とに待つ事少なからざるべし。然ども教会員の凡てがテサロニケ教会員の如く厚き愛心と強き忍耐力と挫

けざる熱心と祈りと工とを以て伝道に当る是れ真に伝道の成效を奏するの道なり。是れパウロが自己の学識と能力に依らずして遂にテサロニケ教会員に依頼したる所以とす。

予はテサロニケ之教会が伝道上大に功ありし所以は実に彼らの熱心なる工と祈りにありし事の真理なるを悟りたるなり。そは予は信者が伝道の精神と其祈りとは真に空しき事にあらざると実験したればなり。予が生れたる高知教会の如きは即其実例なり。

予の受洗したるは明治十八年五月十八日なりし事と思ふ。其中会員二十四名にして教会を建てたり。当時の小数の信者は信仰こそ幼稚なれ其精神は甚活潑なりき。彼らは皆各自に工けり。予ら自由党側の信者らは党勢の忙しきと其党勢拡張と対政府の運動、政談演舌の盛なる中に於て亦大に伝道を試みたり。予ら初めは少壮なる国士の中に批評されたり。然ども之に弁言する事なく国士の中へも亦一般の人々にも頻りに道を伝へたり。斯る勢にて教会設定の初より大に伝道せり。個人伝道に坐談に公開演説に若くは屢々劇場の如き汚き場所に於て大演舌会を催したり。又時々野外に於ても屢々クリスト教演舌若くは説教を為したり。当時全国の自由党その地に伝道する事あれば予らは必ず模範として当地の黨員に伝へられたり。斯の如き状態なりしが我々高知教会は長足にて発達し、僅に十年を出ずして千人以上の会員を得るに至り後より進みて前に立ちたる諸教会を凌駕し既にして浪速中会に於て第一位を占むる教会と成れり。今日に於ては高知教会は社会の一勢力と成り居れり。此北海道に於ても聖園教会や北見の教会の如き皆散り広りたる高知教会の元動力たらざる無し。

抑本年の協同伝道に於ては我教会は大な心と厚き愛と熱心なる祈りと敏活なる働にありて当地者の魂を主に献けざるべからず。一部の人々が働き他の人々が之を冷淡にて傍観するか如き事は逆も物に成らざるなり。須く一致の牧師、一致の祈、一致の工舌如何なる例の方法なりとも互に応援して働くべきなり。予は我が教会員の中には主の審判の中教員全体が善且忠なる僕人と主の御言を載かん事を切望するなり。悪く且つ怠れる僕が悪しと云はるゝを一人も無からんことを祈らざるへからず。吾人は各主より預きたる力を御互に働かすべきなり。

晩年を北海道各地での福音伝道に捧げ尽した坂本直寛は、明治四十四年九月六日札幌で胃癌のため死去した。享年五十九歳、

明治は一年足らずで終ろうとしていた。九月八日に北辰教会で行われた葬儀について報じた九月二十一日付の『福音新報』は、彼を「我政界初代の恩人にして又基督教会の恩師」と称え、少壮時代の民権論者としての活動を略述した後、「将来に対しては多大の嘱望を以て国家に尽さんよりは宗教を以て国家を救はん事の最も緊要にして且つ有力なるを自覚し、断然斯界と絶ちて基督教牧師となり、専ら福音宣伝に従ふこととはなれり。爾来十数年一日の如く、高潔なる人格と熱烈なる弁舌を以て教会の進歩発展に努力奮闘し、其効績頗る顕著なるものありき。先年病を得て札幌の自宅に静養されし間も、北辰教会牧師米国留学中なりしを以て之が代理として尽力し、近くは朝鮮応援伝道として遠征を試み、帰来早々函館教会を助くる等、一日として寧日なく、尚敢て倦怠することを知らざりき。」と記している。

(1)『坂本直寛著作集』下、一二六頁。

(2)本書は、ピアソン夫人の *Through Kiyami in June, 1910.* と共に、小池創造・吉田邦子訳『六月の北見路』（北見教会『ピアソン文庫』）として邦訳されている。

（國學院大學法学部教授 山下 重二）